（９）附属幼稚園

ア　設置の趣旨（目的）及び組織

ⅰ）　本園の任務

a　教育基本法，学校教育法等に基づき幼児を保育し，適当な環境を与えて，その心身の発達を助長するとともに，保育に関する研究を行う。

b　学部学生及び大学院学生の実地教育，実地研究に協力し指導に当たる。

c　大学及び附属小・中学校と連携し，教育理論及び実践に関する研究を行う。

d　地域社会における幼児教育の振興に寄与する。

ⅱ）　組織

附属幼稚園は，園長，副園長，教諭３人，養護教諭，非常勤講師２人，教育補佐員（特別教育支援員），教育補佐員，事務補佐員，保育支援員（預かり保育担当）３人により構成される。

ⅲ）　教育目標

「元気な子ども　やさしい子ども　考える子ども」

イ　運営・活動の状況

ⅰ）　教育研究・管理運営の状況

a　教育課程改善研究の推進

平成25～27年度の「遊び込む子ども－学びの基盤に着目して－」をテーマとした研究を終え，平成28年度から新たなテーマで３年計画の研究を開始した。今年度は，研究２年目に当たる。

1)　研究主題

「遊び込む子ども－教育課程の創造－」（２／３年次）

2)　研究目的と内容

平成25～27年度の前研究では，幼児教育に携わる者にとって馴染みのある「遊び込む」という言葉に関し，子どものその姿について深く掘り下げた。１年目は，保育者が幼児の遊ぶ姿に何を見出したときに「遊び込んでいる」と感じるのか，イメージや感覚のレベルを超えて「遊び込む」姿を捉え，２年目は，遊び込むための環境や教師の援助を探り，３年目は，遊び込んだ子どもの育ちを探った。

昨年度からは，平成27年度までの研究の総括として３年間の計画で，遊び込む子どもの姿を手がかりとしながら従来の教育過程を見直し，再編成することに取り組んだ。今年度は，教育活動の項目のうち，昨年度の「遊び」に引き続き，「みんなでかかわる活動」「生活行動」の内容や教師の援助について，これまでの内容を整理し見直しをした。また，従来の３つの活動名や３つに分類するための観点，教育時間の表現方法について検討を重ね，活動名を「あそび」「みんな」「せいかつ」と変更し，観点等も修正した。

3)　平成29年度教育研究会の開催（第25回幼児教育研究会　10月11日）

幼稚園・保育園に加え小学校や教育行政関係機関からも大勢の参加者があり，総勢277人の参加が得られた。

午前中の公開保育では，保育室，遊戯室，出会いの広場などの屋内空間と，園庭や園舎周りの屋外空間の様々な場所で，仲間とかかわり，主体的に遊ぶ幼児の姿を公開することができた。参

会者からは遊びに集中する幼児の姿や，幼児の自主性を引き出す教師の援助について高い評価をいただいた。

研究発表では，幼稚園や保育園現場の方から，活動時間や指導計画が分かりやすい，真似したい，共感できる考え方がたくさんある，研究の方向性がよい，この教育課程を活用したい，自園に取り入れたいなど好評価を得た。

午後は，３つの会場に分かれ，３，４，５歳クラスそれぞれの保育の様子や教師の援助についてと，各園の教育課程について話し合い，幼稚園教諭，小学校教諭，保育士，行政関係者，研究者等，各々の立場から意見交換を行うことができた。その後，田園調布大学大学院人間学研究科子ども人間学専攻教授であり，また，東京大学・青山学院大学名誉教授である佐伯　胖氏から「子どもを人間としてみる保育に向けて」と題して講演をいただいた。参会者からは，自分の保育観に大きな刺激を受けた，これまで思っていたことが確信になった，子どもを尊厳あるものとしてとらえることの大切さを改めて実感した，敬意をもって子どもたちを見つめていきたいなど，多くのことに気付き，学んだという感想を多くいただいた。

4)　研究紀要の刊行

年度末３月に平成29年度研究紀要『遊び込む子ども―教育課程の創造―vol.２』を刊行した。

今年度は，教育活動の「みんなでかかわる活動」と「生活行動」における内容を，これまでの指導計画や，蓄積した事例，指導資料をもとに見直し，各期の「こんなふうに育ってほしい」という項目に付け加え，事例とともに紀要に示した。また，従来の３つの活動名や３つに分類するための観点を変更し，活動名を「あそび」「みんな」「せいかつ」とし，それぞれの観点とともに紀要に示した。

b　管理運営の状況

1)　教職員や保護者等による学校評価を生かした学校運営改善の取組

年度始めにグランドデザインを作成・確認し，１月には保護者と教職員による学校評価を行った。学校評議員会を平成29年５月16日及び平成30年２月28日に開催した。保育や研究の成果及び学校評価の結果を示し，協議を行うとともに，園の活性化のために重点的に取り組んできていることについてご意見をいただいた。当園の課題と今後の取組について共通理解し，いただいたご意見を次年度の改善に反映させることとした。

2)　教育環境の整備と安全管理の徹底

幼児の豊かな体験の場として充実した環境となるように，毎月全教職員が園庭等の安全点検や・整備作業等を行った他，本学附属小・中学校から週１回用務員が来園し，環境整備を行った。本学学生のボランティアによる園庭の整備も充実した。また，幼児の遊びが一層充実するよう，今年度も緑の小道内のこども広場に，ブランコやスラックライン等を保護者ボランティアから設置してもらったり，本学教員や学生からメンテナンスを行ってもらったりした。園庭では，幼児が自由な発想で遊べるよう，雨どいやすりばち，ままごと道具などを用意し，自由に使えるようにしている。

3)　安全確保の取組

警察や消防署の協力を得て，火災，地震，不審者侵入等を想定した避難訓練を年６回実施した。特に東日本大震災の教訓を踏まえ，地震の震度に合わせた対応などを徹底し，訓練を実施した。防災に関し，保護者向け緊急連絡メール配信システムを継続するとともに，地震に関する申し合わせを保護者に徹底した。また，保育環境の安全確保に向けた，環境整備日・安全点検日は毎週定期的に設けている。さらに，PTA交通安全委員が，上越市から講師を招いて幼児や保護者に防犯や交通

安全の重要性を訴える会を開催し，安全への意識を高めた。

4)　本園の魅力に関する調査結果に基づいた積極的なPR活動等

保護者アンケートにおいて，ほとんどの保護者が教育の質のよさに満足している結果を踏まえ，教育のよさをパンフレット配布や地域TVのCM放映，園開放デー等実施により積極的にPRした。園庭開放は，前年に引き続き毎週木曜日開催とし，年間を通して実施した。さらにPRに努める予定である。

年間を通じ，園のホームページとフェイスブックにより，随時，幼児の様子や園の様子を発信した。

ⅱ）　附属幼稚園の活性化・充実のための取組

a　保育の充実を図る取組の推進

1)　毎日の終礼時における情報交換，幼児の遊んだ跡の様子を見ながら話し合う「保育を語る会」や研究推進委員会（週２回）などを通して，保育改善や研修に継続的に取り組んだ。

2)　幼児教育コース教員を主とした大学教員など園外指導者の協力を得ながら専門的な見地を生かした研究や研修を進め，幼児の学びを見とる力や実践的指導力の向上を図った。前述のように２週に１回は大学教員とビデオカンファレンスを行い，連携がさらに強まった。

3)　幼児の学びや育ちについて履歴を集積し，保育や指導計画の改善に生かした。

b　家庭との連携を深める取組の推進

1)　登降園時や連絡帳等を活用した情報交換をはじめ，各種たより等を通して保護者との連絡を密にした。

2)　保育参観日と教育相談日を毎月１回実施。運動会や祖父母参観等の園行事には遠方の親族も多く参加され，幼稚園への理解を深める機会となった。

3)　年２回の「ふぞくフォーラム」（保護者対象）を実施し，幼児教育の重要性や園運営について理解を図ることができた。第１回は，園長が幼稚園の歴史について語り，幼児教育の変遷について情報共有することができた。

２回目は，本学教室を会場に，本学の加藤哲文先生を講師として『親子コミュニケーションから学ぶ「子どもの育て方」「親の育ち方」』と題し，講演をいただいた。講演では，上越市における親子コミュニケーション支援の取組や，ほめることの大切さや効果的なほめ方などについてお話しいただいた。参加者からは，「とても参考になった」「参加できなかった方にも知らせたい」など，好評価をいただいた。さらに父親・祖父を対象としたフォーラム「パパじじの会」を休日に２回実施した。園への理解を深めるとともに，幼児の育ちや大学との連携についてともに考え理解を深める機会となった。

c　大学・附属校との連携・協力の推進

1)　附属小学校１年生の担任との連携を強め，定期的に情報交換を行いながら取組を進めた。幼児と１年生との交流活動を年間を通して４回行い，小学校への接続が円滑に行われるよう，双方向性のある活動展開が可能になるようにした。

2)　学部１年生の教育実習と学部４年生等の幼稚園専修教育実習を受け入れた。

3)　幼児教育コース教員と協議会を行い，研究や運営等の課題について協議した。

4)　大学教員や英語教育専攻の学部生・院生の協力を得て，年長児を対象とした英語活動を毎月実施した。

5)　特別支援教育コース並びに同実践研究センターと連携し，幼児の発達相談環境を整えた。入園選考時にも適切なアドバイスを受けることができた。

6)　学部生・院生のボランティアにより園外保育援助や園行事の充実を図った。

7)　幼小中12年間の学びの連続性を重視し，附属三校園の交流活動や情報交換を行い連携を深めた。

d　近隣の幼稚園・保育所との連携

1)　上越市学校教育研究会幼稚園部会との共催で，本学の山口美和准教授を講師として「環境との関わりを通した幼児期の学びについて～新しい幼稚園教育要領・保育所保育指針を踏まえて～」という演題で講演会を実施した（11月８日）。上越地区の幼稚園・保育所，保護者ら31人の参加があった。講演では，平成30年度より完全実施となる新幼稚園教育要領の主旨を踏まえ，遊びと環境との関わりについて，様々な事例をもとに講演していただいた。その後，講演を受けて各校園における実践研究の成果や課題について情報交換しながら，主にカリキュラムマネジメントについて話し合った。

ウ　優れた点及び今後の検討課題等

ⅰ）　教育研究・管理運営の状況の視点から

a　教育実習の受入れについて

附属園として質の高い教育実習指導を行うことができ，今年度の反省点をもとにさらに改善に努める。

b　大学教員との共同研究等の推進について

幼児期の仲間関係の発達や英語活動，特別支援教育等についての実践的研究を継続して推進する。

ⅱ）　附属幼稚園の定員充足等の視点から

a　園の積極的なPR活動等

附属三校園のパンフレット作成・配布等により，附属園の質の高い教育について今後も積極的にPRする。

年５回の園開放と毎週木曜日の園庭開放に未就園児の参加が増えてきている。特に，園開放では園の様子や取組を紹介しており，問合せもある。園の魅力発信とともに，入園志願者数の増加につながる可能性もあると思われるので，今後も内容を検討しながら実施していきたい。

b　食育等特色ある教育活動の推進

現代の幼児期の教育課題を踏まえ，野菜の栽培活動を通した食育，仲間と関わる中で協調性や社会性を表現する力等を育み小学校への円滑な接続を図る保育，年間にわたる英語活動を教育課程に位置付け，特色ある教育活動を計画的に推進する。また，園に接する森（緑の小道）のさらなる有効活用を探り，こども広場周辺の幼児が立ち入れる道の拡充や自然活用遊具の改善を試みたい。

c　預かり保育の充実

昨年度より実施している預かり保育は，朝は７時40分から，降園後は18時まで行っており，長期休業中も行っている。登録者は通年等利用と一時利用を合わせて約７割で，毎日平均13人前後が利用している。本学教員の協力を得てアンケートを実施したり研修を行ったりして，運営面や体制面の整備，保育内容面での充実を図り，利用しやすい預かり保育に努めている。

d　定員の変更

現在，定員は，３歳児がクラスが20人，４歳児クラス・５歳児クラスが30人である。平成30年度の３歳児クラスから定員を24人とし，３年計画で，各学級ともに24人に変更する。